39

216
55

知連抄并梵灯連歌

古典保存會

迎秋并燈詩

帝國圖書館藏

帝國圖書館藏

知蓮抄

救済周阿傳

六巻

竹之道

解脱上人云て文永年間の人也

幽玄

中古

花の上人

月の上人

光明寺

秀恵

法然上人

解釋寄合を細付ける

[illegible]

[illegible]

[illegible]

旬
同じ世
おすべき事
墨を付
書向
元亀の
慶長の
教文
旬
[illegible]
時に
[illegible]

いかん院の御繁盛の事
塩くさい海の風
のかをりとうとう
忍ぶ月さへ
八月十五夜
月のかげ
老の中くらい
八月十五夜
月のかげ
老の國
桃の
吉祥
国

せさせ給ふ山十ケ年の間の法華経のうち
既と
同神
とうて
吉法師
吉法師
吉法師

赤人の歌等わかばかりもてもて

風情能く詞巧妙なるを面白く付

当座上手し一座の一句二句なれハ三句

とまり句なる事也一座田舎ハ張と

小夫と学ん句の伯しと異わ

雪間くさ又やうやう春

はつ句花より吉句花より姿なり

一不可の事八分孫麦引くかり面白

月雪の事ハ中不可の事なり

ある事ハ中と一つ有相

不風情古抱て文孫義事

一下男事ハ風情古拙ニして文盲ニ
ハ
ハ
ハ

一

古今和歌集の内いろは歌

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

但初心のうちは奇特
なるやうなれども

三十文字の内に名所
名の詠まれぬ事なし

面白面白いつへ伝授
なり

一句四の字を上の字
にして下へ引くる

さらけれども上下
さかさまにしてよ

樣引くるとて文字
の次第

歌の内に詠まれぬ
言葉

一連詩ハ心静ヲ本ト
ス

一

連歌ハ心静かに不叶ゝ又物ゝ
叶ゝ宜ゝ事ゝ
能く見ゝ聞ゝ
句数多ク安と伺て座と
ゞ三三人の百
さしあらよう文重ゝ
古ゝ物ゝ
但物ゝの時
ゝんゝゝと
ゝ

一

[illegible]すくなくあるべし
[illegible]ん[illegible]とおもひて[illegible]
[illegible]叶さんなれば
[illegible]ん[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]
[illegible]

むかしより花の山とらよ鳥と付ハ鶯とすへ
き也次家号の小家也と云ハ名枝
と云ハ梨子と付ハ言葉の細枝の子と有枝
より梨子付ぬらん尤次調の小家
と云ハ花の流せんと曲へ歌よりそ立
此流の肝要ハ調なく流の字
なく了者さ
対の歌て二十餘ハ梅回しん句
詩歌式目 咄しん歌
月ハ名所の事 句の時の流

一 陰ば木の下ゝの苔の冬ごもり 前也 宣

列 ゝ行ゝ陰ゝ列ゝ行ゝ 孫 紫

忍 草 ゝ別 ゝ ゝ集 ゝ ゝ ゝ

一 鳴 洞 袖の露よ涙 巳上

一 ん せ ん き ん き ん は 宮 て ふ か ゝ 雨 ら ぶ ゝ

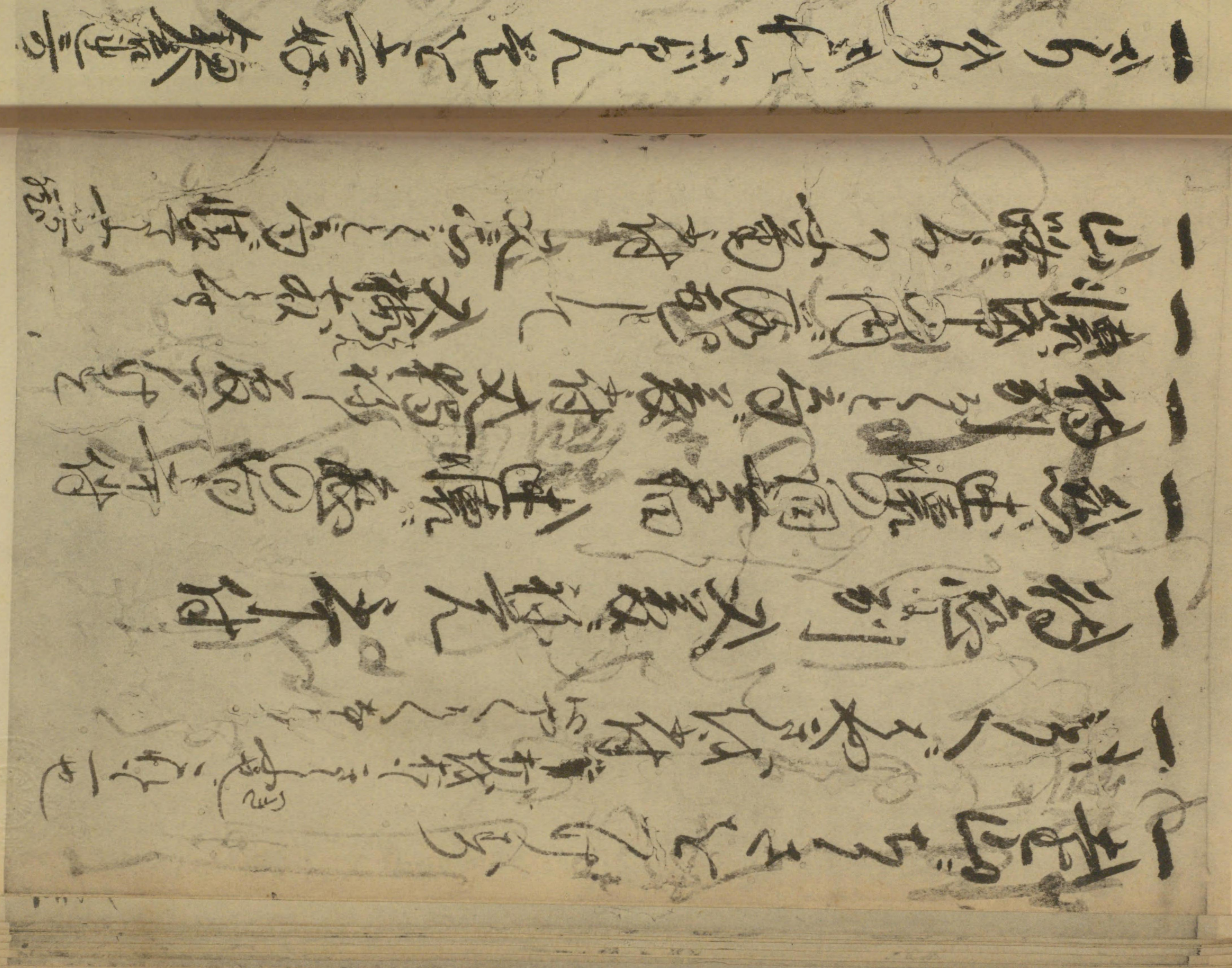
一 句 ゝ 十三句

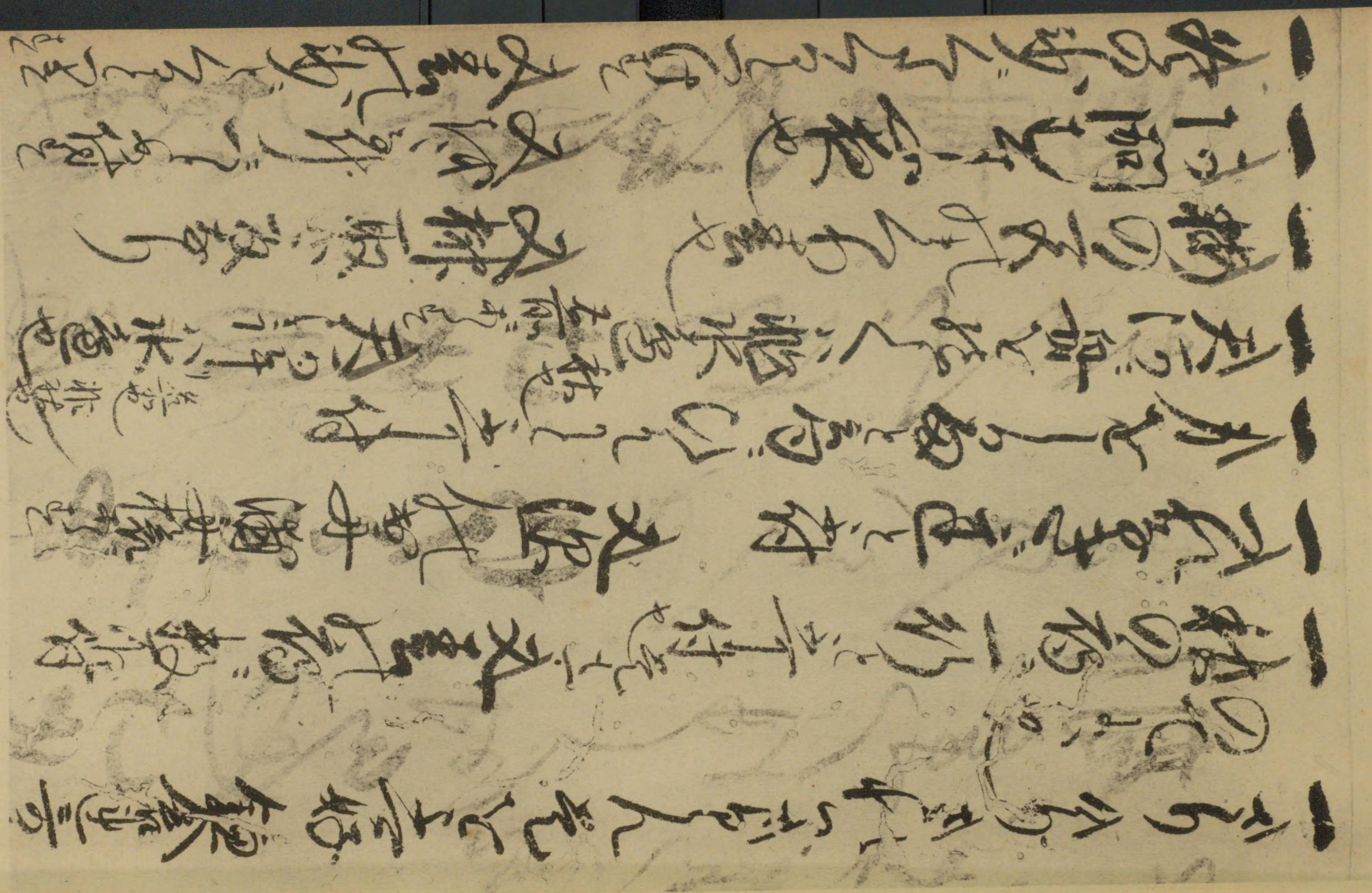
一 切 ゝ ら 中 ゝ ん ゝ ゝ ゝ と 一 句 の 俳 ゝ 十 位

但 ゝ め ゝ ゝ ゝ し 雨 ゝ と 雨 ゝ ん ゝ 四 ゝ ゝ

一 切 ゝ 情 ゝ 暮 ゝ 風 ゝ 涙 ゝ 虫 ゝ の 宮 ゝ 入 ゝ 江 ゝ 親 ゝ 子 ゝ 奥 ゝ 也

一 恵比寿の宮 石若悦樂と寄り悲ハ
悲ハ
一 芭蕉の月とあんしわすれさしと石付
一付
一 鶴津 鶴津おりしき 鶴の名所又
鶴津八丁付
一 ゆきてゆきてゆきてゆきて但ゆきてゆきて
一 ゆきてゆきてゆきてゆきて
一 若のあり 牡丹 白川と赤付
一 九重 なぶ 武蔵
一 花の香 白の花 白と白と





一草本と一句とも三句とも一畑
一深山桜と云句より事始寄合平紙
一同寄とく寄事とする文盛の富士ゞ時紀す者
一ひよすの世とうけと太ゝさゞわきうけと
一鶴と云句より鶯と付くゝ又めゝうとうけと
一古野と云句ゝ付く松嶺ゝ岩石ゝうけと
一冬の時分山ゝ有
一月と云句ゝ付又木枯ゝ時雨ゝ有

一の義六句

一清水に陳ずけて

一舟の中の童ちんと言事 清水

一の春 浦童 つちんと

六十三句の相撲者 豊の下屋敷

同 賦の男 代の梅 ある雲 月せハ

の雲 ちり 山の庵 前寺山

以上十三句 残の句

一秋の田ハ植初ル事ハ八月ニ成ル事ハ下ノ極

一夏ハ春ノ末ヨリ植ル事ハ夏ハ春ノ末ヨリ植ル也

一春山ハ正月ヨリ植ル也十月ハ冬ノ末ヨリ植ル也

一秋ハ春ノ末ヨリ植ル也

一本草ニ衣ハ植初ル也 一諸草ハ油脂生ル也 或本ニハ無也

一苔衣ハ植初ル也 生ル初ルヲ云也

一三ケ月ハ若草也 秋ハ十五日ノ山ノ若草也 春ハ春ノ若草也

一夏ハ夏ノ草也 十五日ノ山ノ若草也

一春ハ春ノ草也 十五日ノ若草也

一三十六月松若干也 此秋
一壱の開 此秋 三五也
十五日の山若干也 此秋
十壱の笑 非春 此春 三五也

一祝の開 同野 此秋 若干也
一向の開 此夏 若干也
一之の開 此夏
一清めてくハ秋也 種也
一同者のまてり夏也
一妙音のまてり夏也
一神の開 此夏
一寿の開 此春 此春 若干也
十同の笑 此秋 若干也
十藥の笑 此秋 此春 此秋
十鹿鳴草 此夏 若干也
十山吉の 此春
十川くちの 此秋
十神まつり夏也
十すハのまつり秋也
十三年の病 此秋

仕ふとそんしたる歌に雪ふる山里の景色を詠ずる事也

山里は冬こそさびしさまされ人目も草も かれぬと思へば

一同詞の病事

山陰月の如く新敷歌に成る歌に用ひ

一二字なりとも有れば宜

一仆句の病事

月はいとあはれなる花の景色

月の花しら花の情まぎれなく

仆句の病也

仆句の病也

仆句の病也

以二句の連二十八行連歌を続ハ
面白き事ともいつくしき見と
作野の梅と云今連二十九行連歌と云

一落句の梅花事

光孝ハ別し也と同しくく

見文花ハ面白き也と月何て弁てと

もとも春ハ花ハ月を用きはハ月草ん

歌の如ハ地ハ三ツ花題の事ハ

一

八月のすゑ花と紅葉とを
賞翫せんと一を次事を題と云也
詩八病を見るに平上去入病云也

一連歌の文韻相通と云事あり
毛詩八平上去入歌云也

大方は秘事とも
先年表白熱詞のあら
なもとさんを聲のすくと下る枯はてる
文韻相通と戸八詞を

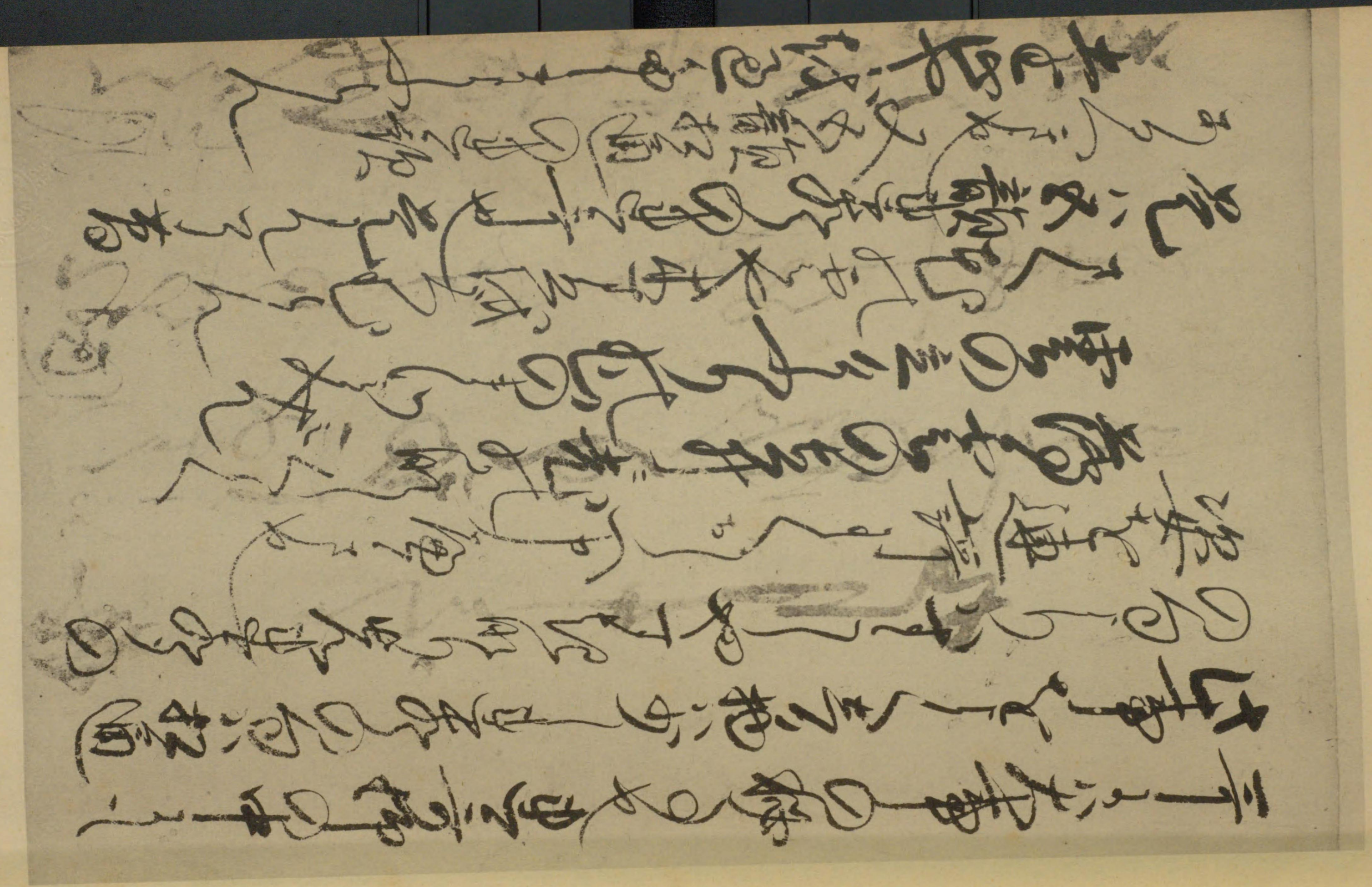
文韻の切り文韻のひくまの

たゞとんを聲のすくとゝ下る相にくらべ
又韻聲をもとゝ中ゝ又韻相通とゝ八詞を

ゝ切ゝ又韻のしきの
字と相通とハ云也三種とはる也
ゝ聲と云ふ所死也
ゝ喻をかん
也とも云ふ
ゝ死ゝ二種
ゝ死ゝ相通ずる
ゝ死ゝ相通ずる
ゝ死ゝ相通ずる

次ニ韻相通ト云ハ大ル見事ニ切ル
而シテ外ノ字ノ気分ハ
相ノ字ト並ベ先国語也
アイウヘフホ カキクケコ サシスセソ タチツテト
十二又ノ ハヒフヘホ ニミムメモ ヤイユエヨ
ラリルレロ ワイウヘヲ
■ 韻の後の句 青蓮寺平八合てアイウヘヲ
ものきゝあり 元清氏韻相通の事云事

三十ハ大事の秘伝中ニ



奥しやまきりの月ほのぐん

友義やゑ面新しく吉量

言ハ松面しんアイウンシ三ゑ

但アイウンゑ月ハ行上よ

くしる讃松面のもゑんをも

すゑ〳〵ゑゑもしゑゑ世

西蝉のゆゑ

花〳〵やあゑあゑ

あはハさゑゑ本よゑ花ゑ

山田や宮の内の
人々やおのれと
本ゝらんの春の
春の霞の
秘事口傳
相傳
道の
秘事口傳
相傳
道の
秘事口傳
相傳
道

[illegible]

一 [illegible]

侍 [illegible]

[illegible]

[illegible]

救済法師

坂 [illegible]

[illegible]

[illegible]

同十二日

[illegible]

面白き歌共多り [illegible]

同 [illegible]

[illegible]

一首つゝ

仏の手にて南無阿弥陀仏と唱へ
同じくんば仏と南無阿弥陀仏
ともいはんとて一遍首つ稱

仏の恩や忘れ山里の草のうもれん
ものとこそ思へ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

御書
安元二年大納言
殿御事
柚和尚
所要被
聞
九州下向寛初
中下
今西
但上洛
被
御
焼
失
其後
事
定
之
隨
生
讃院
竹
御
教
向
慶元年
十月
若
近
所
二通
被
書
也

南
奥
偽
書
也

隨生讓院竹園御教書の通於慶元年
十月若近風体ハ古様二通被書者也

南方ハ奥儀口傳ハ事ニ為ら不ル
大閤御判

本ニ
于内永享拾年林鐘十八日慈尊院本
書写之也
筆ヒ人判

寶徳弟参南吕上旬ら於書写
了不可有外見者也

梵灯近年連歌付ケ連歌
仙洞御発句被申付ケ
被仰出ケ
同名発句二句
慈永世三年二月八日

一書

左

風雲乃寄ますそ
ちとみすかす
まはをとそ見
京

右

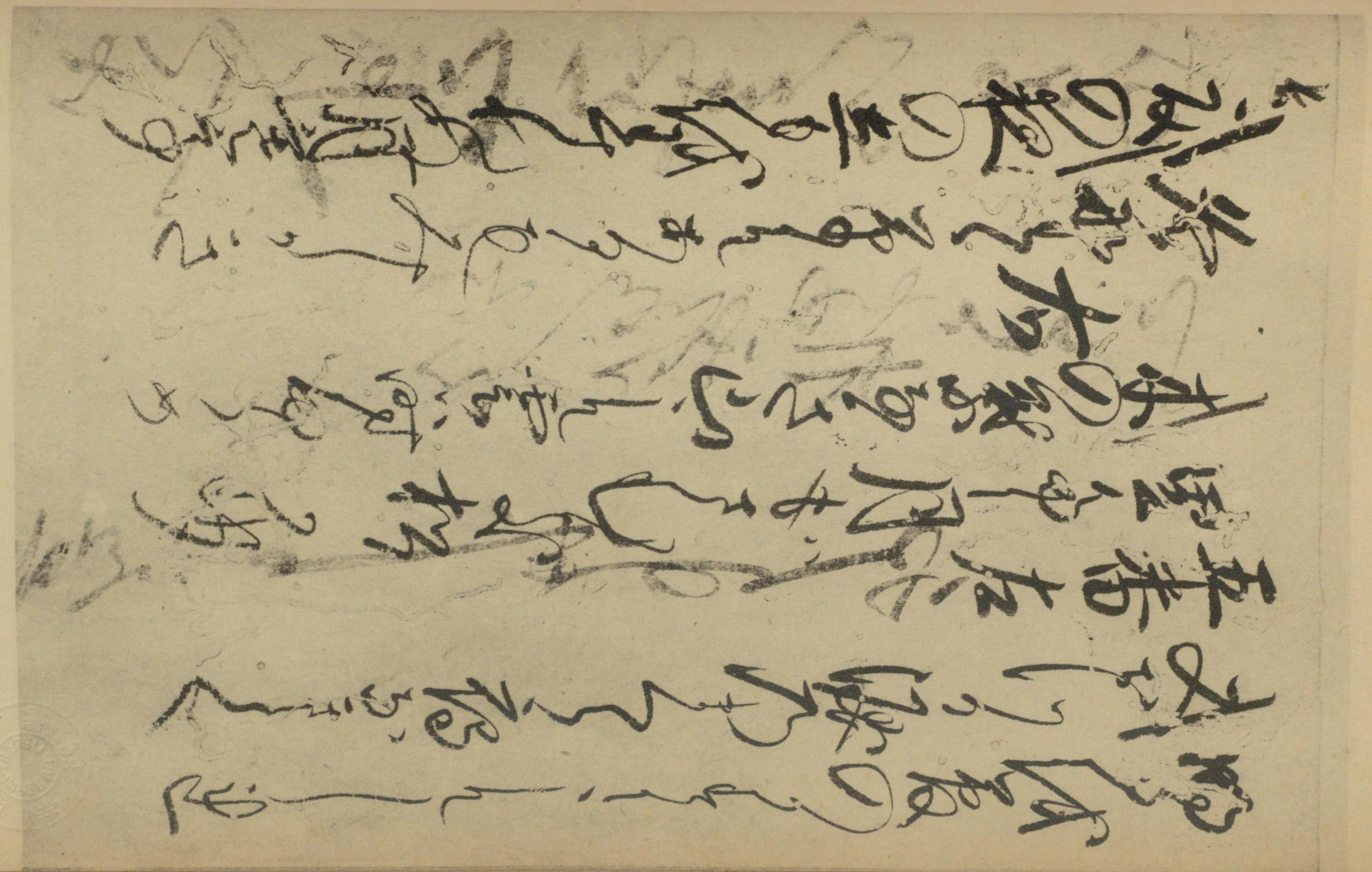
夢多く袖も
濡れ
同じ
付合の
也
所

慶永卅三年二月八日

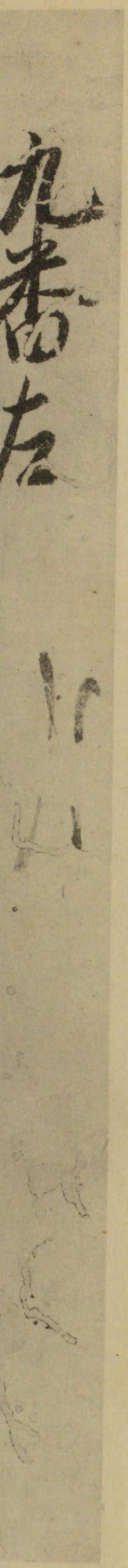
番左
無右
鄭
結
竹
三番左勝

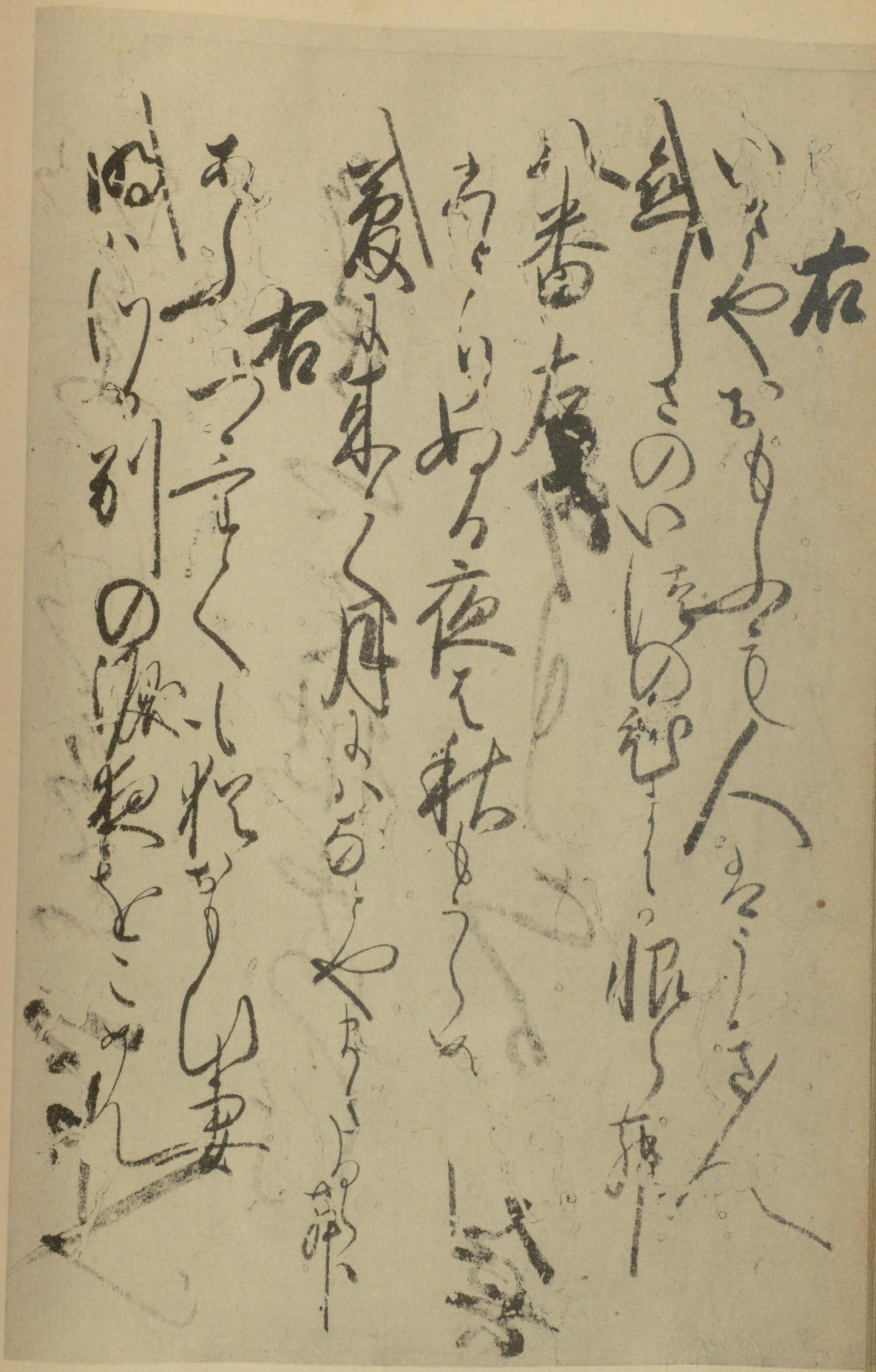
右

長崎奉行所より雲州
藩へ毎年二月十月
右
松平
のうへ
様
御
家
来
中
川
清
兵
衛
殿
ゟ
ハ
ま
ち
ハ
ま
ち
ニ
て
ハ
ち
ま
ん
ま
ん
ち
ゃ
や
ち
ん
ま
ん
ち
ゃ
ま
ち



京毒右
雀ゆき
佛とみちの書と
右
仲里見た里深のり
雪のやうにふる
右
春
緑もまじる山
富士と雪の月





九番右

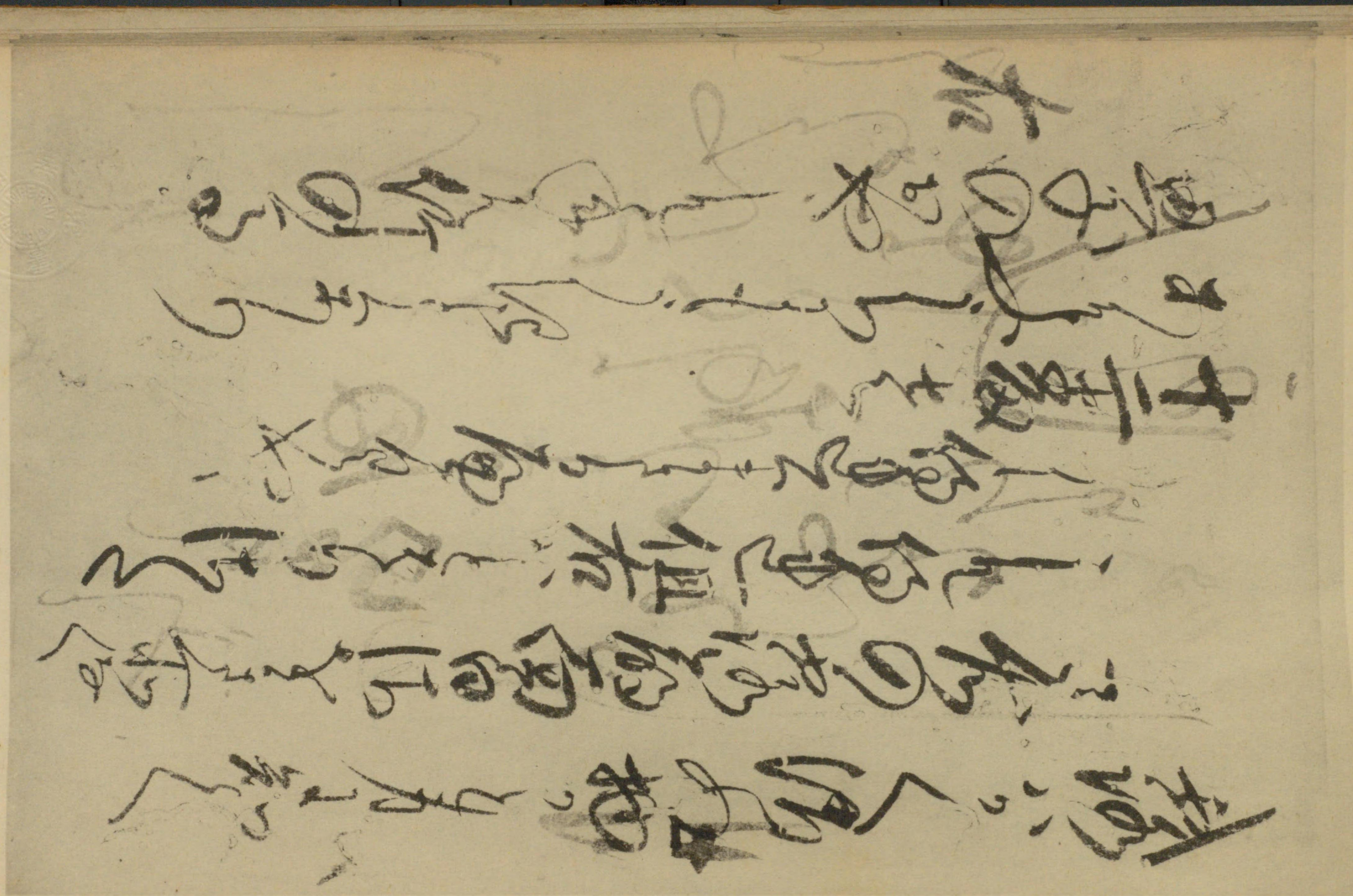
右

十番右

右

十番左

一



世をとりあつめたる
歌ども
十二書左
四ちらし書
右
奉敕撰之

[illegible]

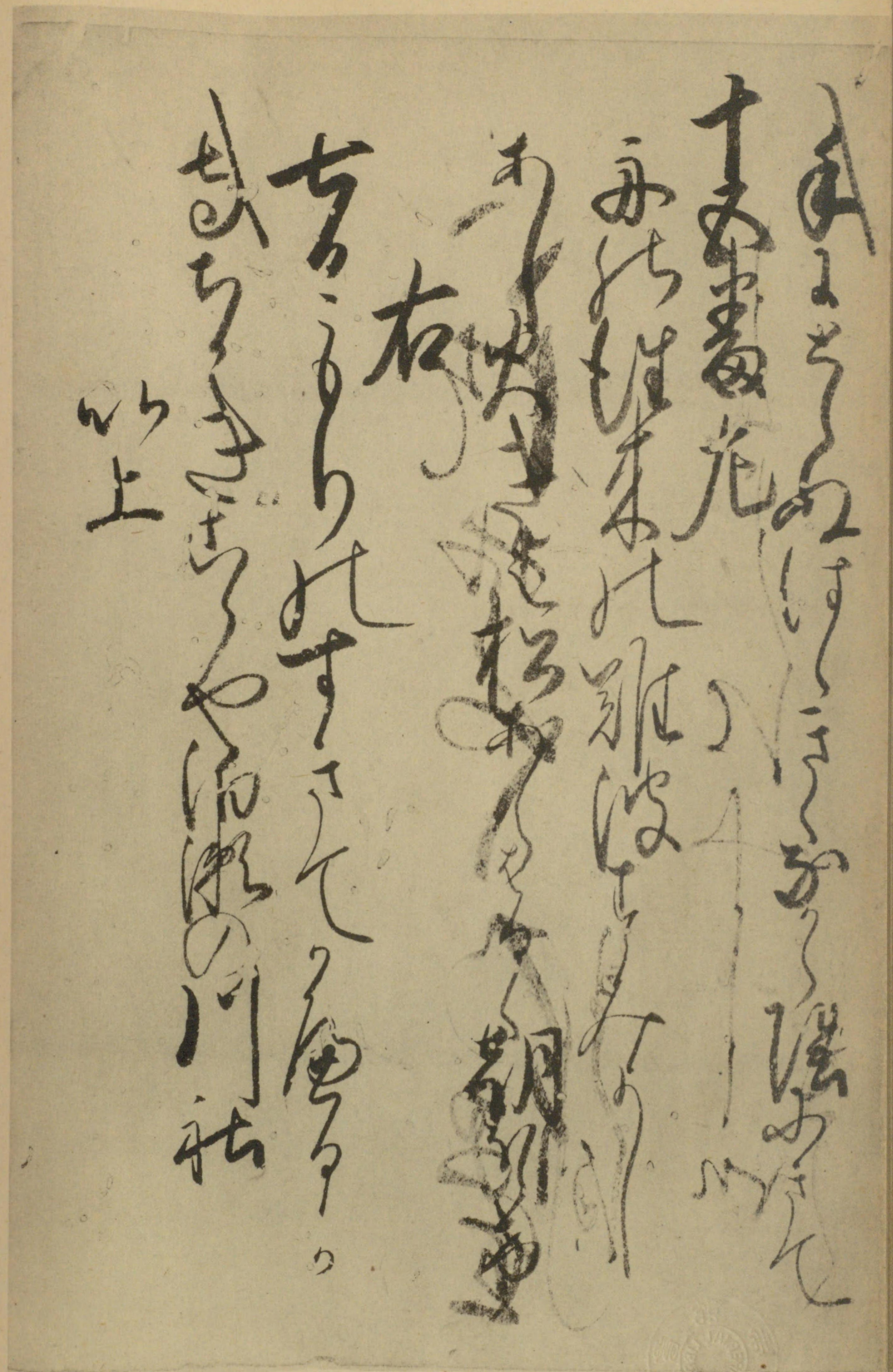
[illegible]

[illegible]

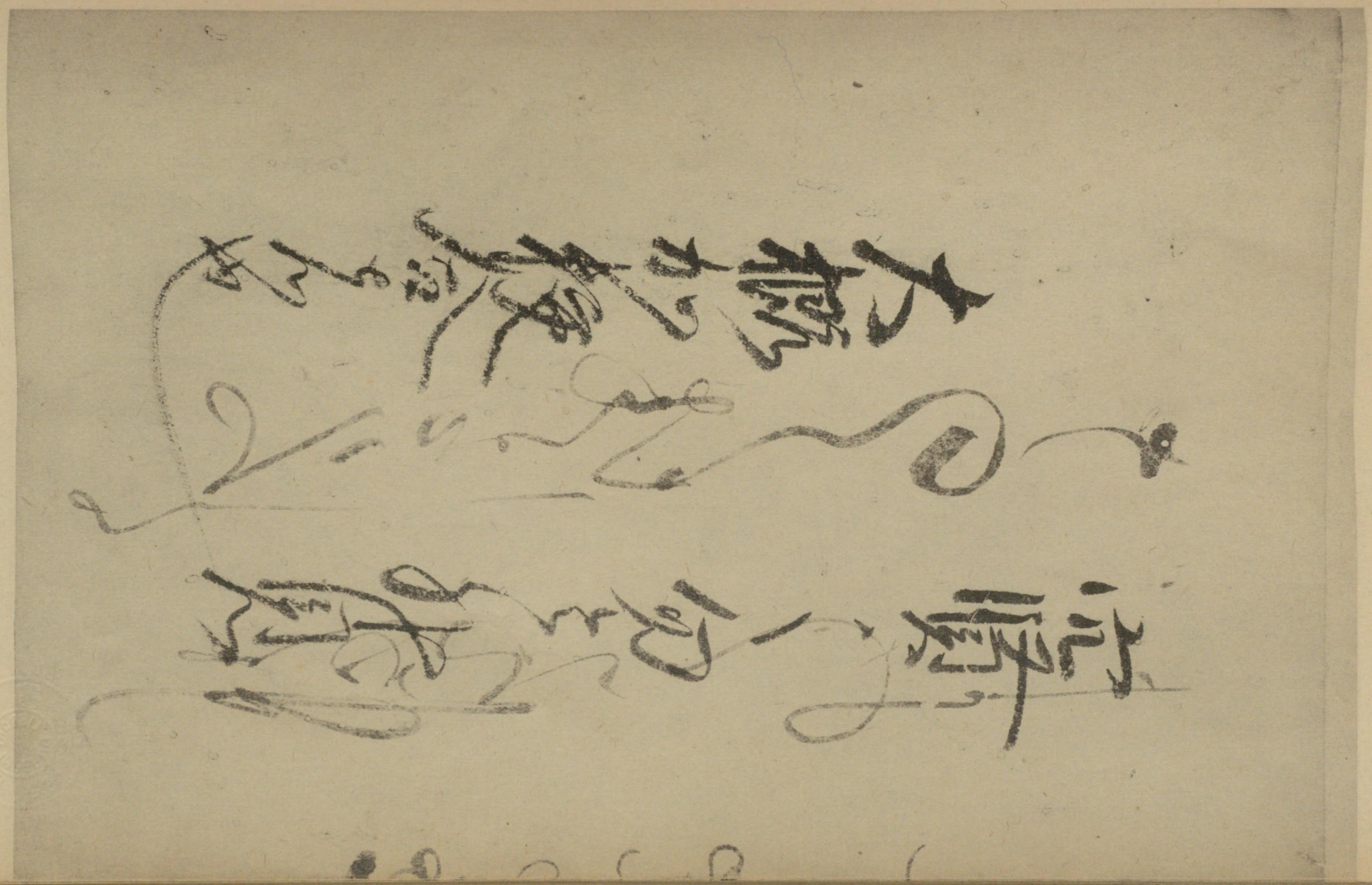
[illegible]

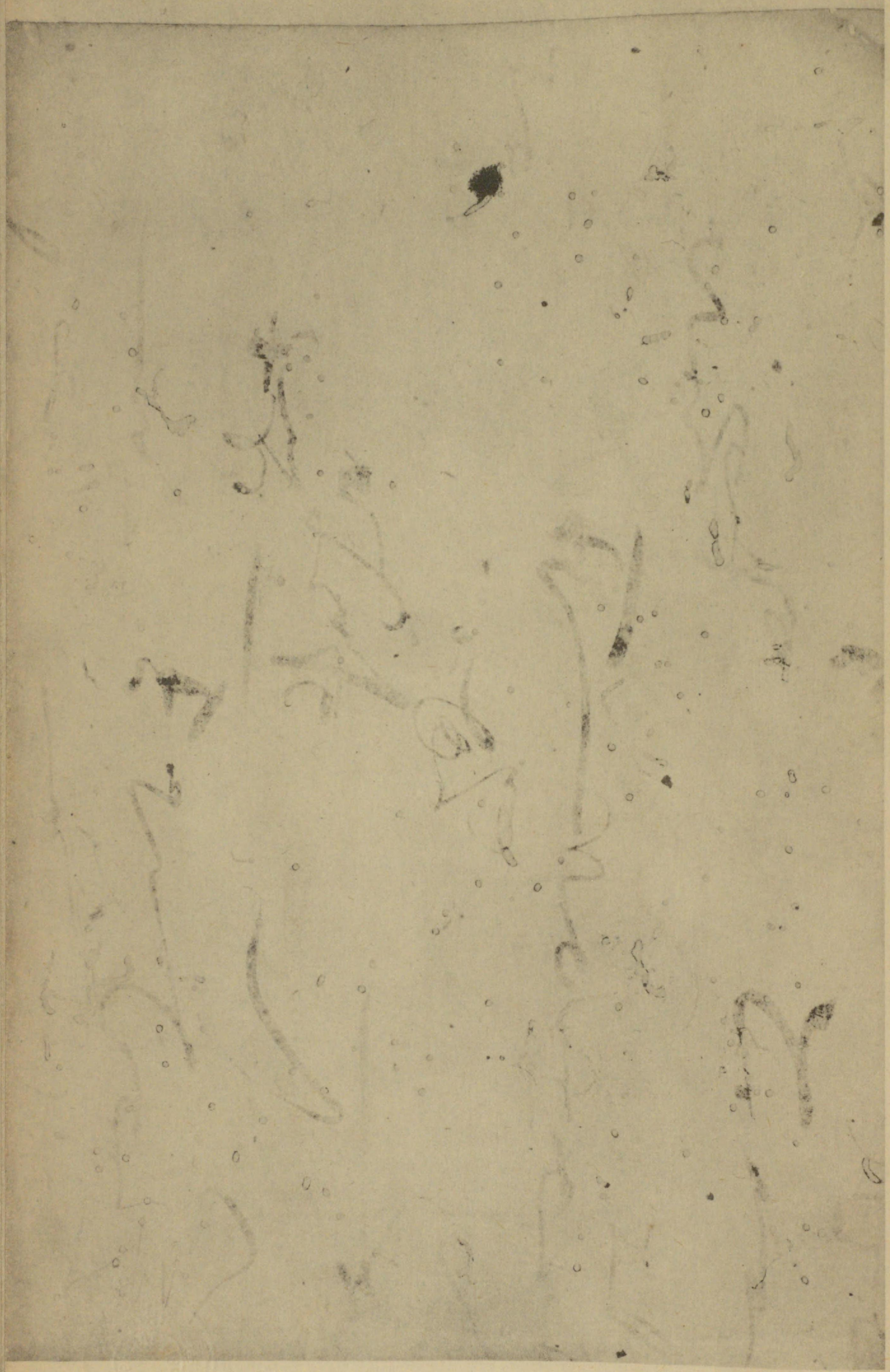
[illegible]

[illegible]



本下
寶三帝經
畫寶德光
寶五眞文下
高上玉文
靈寶





宮内省圖書寮御藏知連抄并梵灯連謌解說

宮内省圖書寮御藏知連抄幷梵灯連謌解說

知連抄は二條良基が應安七年（紀元二〇三四年）關白（良基の子師良か）の所望によりて作れる連歌の書にして、連歌の風躰を論じ法式を示し病を說き、五韻連聲五韻相通等の秘說をも開陳したるものなり。圖書寮御藏の古鈔本は、終に朝山梵灯庵の連歌を十五番につがひて仙洞の御點を請ひ奉りたるものを併せ寫せるものにして、縱九寸八分餘、橫六寸九分餘の袋綴の大冊子なり。前後に黑色の紙表紙を附し、前の表紙の左端には、黑き枠を印したる白紙の題簽に「知連抄幷梵灯連謌」と墨書せり。紙數は全部二十五張あり。料紙はすべて書狀の裏を用ゐたるが、今は裏打を施し、その裏打の紙、上方に於て原紙よりは一分五厘乃至二分ばかり長くあらはれたり。されば原紙の高さは本の高さよりも低く九寸六分乃至九寸六分五厘なり。（今の表紙及び題簽は、この裏打と共に加へられたるものなるべく、共に新しく見ゆ）第一張は、表面中央に「知連抄幷梵灯連謌」と墨書し、裏面には文字なし。表面の汚損せるより觀れば、この一張はもとの表紙とおぼし。第二張最初に知連抄とありて次行より本文に入り、第十六張表面にて終り、つゞいてその裏面及び第十七張表面に奥書あり。次に第十七張裏面に「梵灯近年隨分付たる連謌を仙洞へ御點被申候之處加樣に被仰出候也同長點二句候　應永廿二年二月日」とあり。即ちこれより以下は梵灯連謌合の部にして、第十八張より第二十三張に至る間に十五番の連謌を載せ、續いて第二十四張表面より裏面にかけて寶德三年及び四年の奥書あり。次に文字なき一張あり（第二十五張）その裏面の汚損せるを以て觀れば、もとの表紙なりしこと知らる。

この本書寫の年代は、知連抄の最後に「寶德第三南呂上旬之比書寫之了」とあれば、寶德三年八月の書寫なるが如しと雖、梵灯連謌の終に「本云寶德三年南呂六日書寫畢」とありて、その後に更に「岩寶德第四孟夏下旬之比令書寫者也」云々とあれば、寶德三年八月云々は書寫せし原本にありしをそのまゝ傳へたるものにして、この本は、寶德四年四月下旬の書寫となすべく、紙質書風等、正に當時のものと認めらる。而して、この本は、もとの表紙の上の文字より本文奥書にいたるまで全部一筆にして、處々行間に加へたる私案の類も皆同筆なり。文字はすべて墨書せるが、各條の最初の「一」の字の上に加へたる點と、處々語句の最初の文字の右肩に加へたる斜線（合點符）のみは朱書なり。

知連抄は、從來世に注意せられざりし爲にや、その名だに傳はらざりしを、近年にいたりて福井久藏氏、「二條良基を中心としたる連歌道の建立」と題する論文（國語と國文學昭和三年九月號所載）に於て、良基の著に知連抄ある事を發表せられ、ついで同氏の著連歌の史的研究前編に圖書寮御藏本と京都帝國大學所藏本とを紹介せられてより始めて世に知らるゝに至りしものなり。この他になほ東北帝國大學に一本あり。知連抄の名を有せる本の現今までに知られたるものは以上の三種に過ぎず。その中京都帝國大學の本は、「智連集幷初心書」と題する寫本一冊（平松家舊藏）にして上下二卷にわかれ、上卷には連歌の三儀五躰を說き、終に

右此大事者二條殿より周阿法師申下西國下向之時雖所持九州ニ者留す歸洛せし也周防國ニ一本書留也二人と相傳させへからすされとも家之口傳にも見えす愚身初而三儀五躰お相傳侍也

とあり、下卷は救濟周阿等の近來の連歌の風躰を論じ、大原野千句の時の去嫌の注文を載せ、病の事、五韻連聲相通の事其他を說き、終に

此本不堪として不可見之候特他儀努々不可有之者也

とあり、最後に宗祇作初心書を附せり。東北帝國大學本は知連抄と題する寫本一冊（江戸時代の寫本）にして、その內容は京都帝國大學本の上卷に相當し、語句は異同少からざれども、大體相類似し、終の記文も

右此本者二條殿より坂之周阿法師下向之時所持ことすと云二但此本九州ニ不留周防國ニ一本書留也相構而〻二人共相傳すへからす終ニ未沙汰なしされは家〳〵の相傳ニも不見明愚身始て三儀五躰をしるし侍る也以後ニ周阿か本を召せて二條殿にて御一覽候然者千金莫傳可秘〻〻者也

とありて最後の部分の外は大概一致す。猶この本には、最後に宗祇の執筆の事を附載せり。圖書寮本は、京都帝國大學本の下卷に相當し、その內容は大體之に同じけれども、語句は大に異なる所あり、又京都帝大本の最後にある「連哥に付所にかはる所あり」及び「發句切字事」の二條のみこれには全く無し。

かくの如くなれば、知連抄の完本は恐らくは京都帝國大學本のみにして、圖書寮本も東北帝國大學本も、共に各その一半を存するに過ぎざるものならむ。然れども、京都帝國大學本の書寫年代新しく（江戸中期を溯るものにあらず）轉寫を經て誤脫多く、殆ど解すべからざる箇所少からざるに對して、圖書寮本は、良基の在世中なる嘉慶元年に聖護院門跡（後光嚴院の御子覺增か）に書き進ぜし本より出でて、永享十年及び寶德三年の轉寫を經て寶德四年に書寫せられたるものなれば、その傳來明らかに、年代亦古く、隨つて轉寫の誤も少かるべければ、憑據となすに足れり。しかのみならず、その奧書によりて、この書撰述の由來と年時とを知り得るが如き、最も貴ぶべし。

又圖書寮本は、知連抄としては後半のみに止まれど、學問上の價値はこの後半に多し。即ちここに載するところは多岐にして、當時の連歌道の實際を告ぐる點少からずして、連歌史上に新資料を供するものといふべく、殊に、ここに載する大原野千句の時の注文は、應安新式の應用にして、彼の新式の實物の見在せざる今の世に於いて、その面目を窺ふべき唯一の資料たり。又その五韻連聲、五韻相通の說の如きは、連歌道の實地については何の效もなき言なれども、ここに載せたる五十音圖と共に國語學史の新資料として價値少からざるものなりとす。

圖書寮本の終に附載せる梵灯連哥合は、當時、世一の先達の名を得し朝山梵灯庵の連歌を左右に番へて、應永二十二年に上皇の御點を申請け、上皇之に點と評語とを加へ給ひたるものにして、未だ他に所見なきものなり。

近年、連歌の研究漸く緒に就かんとするに當り、連歌道の祖師ともいふべき良基の未知の著作の發見せらるゝもの一二に止まらざるは甚慶すべき事にして、曩に良基の連理秘抄を複製してはじめて世に紹介したる本會が、特に允許を蒙りて、近年發見せられて未だ刊行せられたる事なきこの書を、はじめて撮影印行する事を得たるは、本會の光榮とする所なり。たゞ之を複製するに當り、紙幅の都合上、少しく縮寫せざるを得ざりしは聊遺憾なきにしもあらざれども、研究上には多くの支障なかるべきなり。

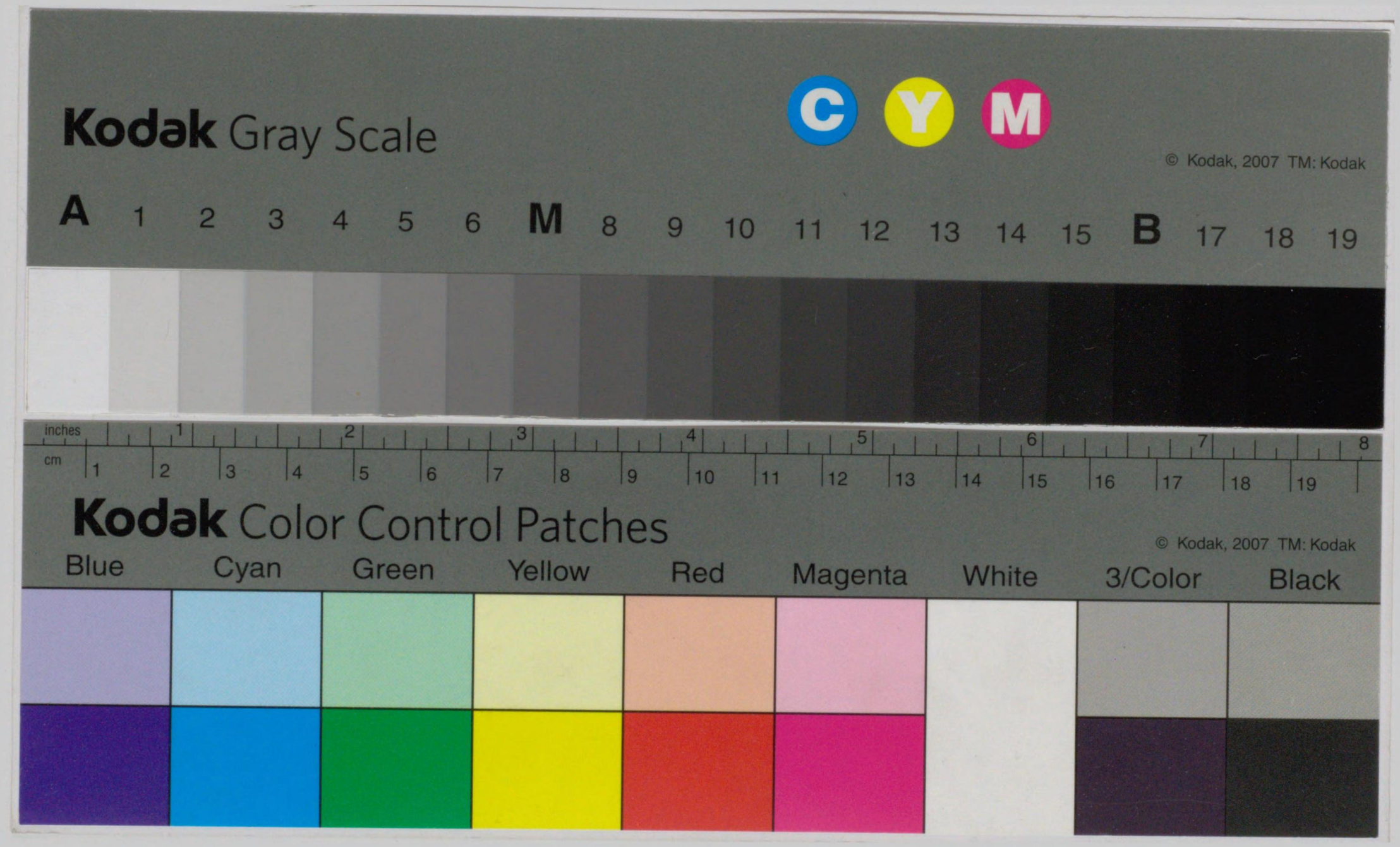
昭和七年六月六日

橋本進吉

216
55

昭和七年六月廿五日印刷
昭和七年六月廿八日發行　（非賣品）

發行兼印刷者　古典保存會
東京市下谷區上野公園東園
右代表者　七條愷
東京市神田區花房町五番地
印刷所　金屬版印刷所
東京市神田區花房町五番地
古典保存會事務所
電話下谷六七八八番
振替口座東京四四九四八番


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black